

平成 21 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520567

研究課題名（和文） 両大戦間期ハルビンにおけるロシア人社会の歴史的位相

研究課題名（英文） Historical aspects of Russian community in Harbin between two World Wars

研究代表者

中嶋 毅 (NAKASHIMA TAKESHI)

首都大学東京・大学院人文科学研究科・准教授

研究者番号：70241495

研究成果の概要：両大戦間期の国際都市ハルビンにおけるロシア人の諸活動を分析することを通じて、在外ロシア社会とソ連体制との相互関係を実証的に考察した。その過程で、ハルビンのロシア人社会が中東鉄道を通じてロシア革命後もロシア本国（1924年以降はソ連）との結びつきを維持したこと、ハルビンで開花したロシア文化が異文化接触という条件の下で独自の発展を遂げたこと、を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史、ロシア人、中国、ハルビン、亡命者、知識人

1. 研究開始当初の背景

申請者は平成 16 年度財団法人三菱財団人文科学研究助成金を受けて、研究課題「国際都市ハルビンにおける異文化接触に関する史的研究」を遂行し、ハルビンにおけるロシア人社会が展開した教育活動とりわけ高等教育機関の整備を中心に研究を進める過程で、元来は亡命系ロシア人が設立した在外ロシア人高等教育機関の多くが、1924 年の中ソ国交回復後にはソ連系管理組織の管轄下におかれるようになったことを明らかにした。

その後も史料の収集と検討を進めた結果、少なくとも 1935 年の満洲国への中東鉄道売

却時までは、亡命系ロシア人研究者とソ連系ロシア人研究者との一定の協力関係が存在し、ソ連本国でも亡命系ロシア人研究者の研究成果が高く評価されていたことが明らかになってきた。こうしてこの研究課題を進める中で申請者は、ハルビンの亡命系ロシア人とソ連系ロシア人との関係が単に敵対的關係にあっただけでなく、現実には中国東北という特殊な環境の中であって、ロシアの利害を擁護する上である種の協力関係もまた存在していた、という着想を得るにいたった。

2. 研究の目的

前記の研究過程を踏まえて、本研究は、1917年のロシア革命から1945年の第二次世界大戦終結を経て1950年代にいたる時期の、国際都市ハルビンにおけるロシア人の諸活動を分析することを通じて、亡命ロシア文化とソ連体制との相互関係を歴史的に考察することを課題として設定した。

本研究は、ロシア人亡命コロニーとして重要であるだけでなく東アジア有数の国際都市でもあるハルビンに在住したロシア人の政治的・経済的・文化的活動の展開過程を追求することを通じて、ハルビンにおける旧ロシア文化とソ連文化との接触について考察し、その過程で東アジアにおける在外ロシア文化が有した意義を歴史的に検討することを目指した。

3. 研究の方法

本研究においては、ハルビン在住ロシア人の政治的・社会的および文化的活動の具体的な様相を具体的に追求するために、(1)ハルビン在住ロシア人による政治的・社会的活動の実態の解明、(2)彼らとソヴィエト権力との相互関係の歴史的な分析、(3)ハルビンにおけるロシア文化の状況とその継承のあり方の考察、などの諸点を具体的な考察の課題とした。

この具体的な課題を解明するために、ハルビン在住ロシア人が発行していた新聞『ザリヤー』『グンバオ』や各種雑誌などの定期刊行物や、ハバロフスク地方国家文書館に所蔵される未公刊文書（通称ハルビン・フォンド）を閲覧して必要な情報を収集し分析した。また、これらの一次資料の分析とあわせて、かつてハルビンに居住しその後世界中に離散したロシア人が発行した出版物を収集して、上記の検討課題の分析に利用した。

4. 研究成果

(1) 1917年のロシア革命は、極東のハルビンにも波及した。ハルビンにおける革命についてここで触れることはできないが、ハルビンでも労働者・兵士の運動が高揚し、彼らは中東鉄道管理局やハルビン市当局に対抗して独自の運動を展開していた。十月革命ののちにはボリシェヴィキの率いるソヴィエトが権力掌握を図ったが、中東鉄道長官ホルヴァートは革命派鎮圧のために鉄道付属地に中国軍を導入して、革命派勢力を一掃しソヴィエトも解散に追い込んだ。こののちハルビン政局は極東ロシアの内戦と列強の干渉とに密接に連動しながら複雑な動きを示したが、その過程で旧ロシア勢力の発言力は次第に低下し、中東鉄道理事会においても中国側

の影響力が増大していった。

また中華民国は、1921年に東省特別区市政管理局を設置してハルビン自治市の施政権を回収した。さらに1926年になると中国側当局は、事実上ロシア人が独自に運営していた従来の市会と市参事会とを強制的に解散して、行政長官公署を監督庁とする市政局と市自治会からなる新自治制へと移行した。これによりロシア人は、市自治会に代表者3名を送るだけとなった。こうしてロシア人の政治的影響力もまた、次第に低下していったのである。

他方でロシア人社会は、ハルビン経済においてきわめて重要な位置を占めていた。もとよりロシア革命前のような特権的な地位は喪失していたが、それでもユダヤ系ロシア人の商業活動を中心に1920年代には一定の繁栄を回復した。日本側調査によれば、1922年時点でハルビンの商業施設総数3,524のうちロシア系施設は1,374件で、中国系施設1,667件に次いで全体の39%を占めていた。1920年代のハルビンでは、ロシア人の商業活動がきわめて重要な役割を果たしていたのである。

ロシア革命とそれに続く内戦は、ハルビンに大量の亡命者の流入をもたらした。コルチャーク政権が崩壊した1920年と極東共和国がソヴィエト・ロシアに統合された1922年のロシア人人口が突出しているが、この時期にはまた、ハルビンのロシア人に占める白衛軍従軍経験者の比率が大きな位置を占めるようになった。彼らの一部は、東北軍閥の部隊や警察部隊、治安部隊などに雇用され、軍事的性格を維持し続けた。革命と内戦の後に流入した人々に見られたいまひとつの特徴は、ボリシェヴィキに反対して反共産党政権に協力した知識人が数多く含まれていたことである。その数字の確定は困難だが、現代ロシアの研究者の推計によれば、中国東北に亡命したロシア人学者の数は、ロシアから亡命した学者数の30-35%を占めていたという。

(2) 1920年代のハルビンは、1924年に中ソ合弁となって安定化した中東鉄道の発展につれて、全体としてはロシア人社会の繁栄の時期を迎えた。中東鉄道の経営権を通じてソ連は東アジアにおける政治的・経済的地歩を固め、これにともなってロシア人社会はハルビンにおいて一定の影響力を維持し続けることになったのである。さらにソ連当局は1925年4月に、中東鉄道職員の国籍をソ連籍もしくは中国籍に限定したため、無国籍ロシア人職員の大部分がソ連国籍を取得することになった。

しかしこのことは同時に、ハルビン在住ロシア人社会に政治的分裂をもたらすことになった。かつてのハルビン居住者の回想によ

れば、1924年までハルビンでは「赤系」と「白系」との深刻な区別はなかったが、1924年以降は政治的対抗の構図が登場したという。中東鉄道職員として生活を保障されたソ連系ロシア人と日々の生活を考慮せざるをえない亡命系ロシア人とのあいだの経済的格差もまた、両者の対立に無視しえない影響を及ぼしたと考えられる。

ハルビン在住ロシア人の生活状況は、1920年代末から30年代にかけて次第に悪化していった。1929年の中ソ紛争はソ連側の勝利に終わったものの、その後中国当局はソ連系を含むロシア人全般に対して一段と強い圧力を加えはじめた。さらに満洲国成立後にはソ連系経済機関に対する妨害が強まり、ロシア人社会の経済力は徐々にその比重を低下させていった。この傾向に拍車をかけたのが、1935年の中東鉄道売却であった。その結果、中東鉄道に勤務していた大量のロシア人がハルビンを退去した。

1932年3月の満洲国成立後には、圧倒的な日本の影響の下で、ロシア人社会も次第に日本化されていくことになった。すでに満洲国協和会がロシア人亡命者を統合する機能を担っていたが、1934年12月には日本の特務機関の主導によって、日本では「白系露人事務局」の名で知られる「在満ロシア人亡命者問題事務局」がハルビンで組織された（以下では日本側の通称で表記する）。白系露人事務局は、協和会組織と協力しながら、特務機関の指導の下でロシア人亡命者を統合し始めた。満洲国を構成した「五族」に準じた地位を与えられた在満ロシア人の生活にかかわる広範な領域に関与した事務局は、在満ロシア人を代表して当局とわたりあう唯一の代表機関として機能したのである。

(3) ロシア人人口が増加するにつれ、ハルビンではロシア人子弟の教育に対する需要が急速に増大した。初等教育が拡大するにつれて、その卒業生をうけいれる中等教育機関に対する需要も次第に高まった。ハルビンで設立された中等教育機関はいずれも、帝政ロシアの文部省が定めるギムナジヤの教育課程を採用しており、大学への進学に道を開いていた。

ハルビンにはじめてロシア人向け的高等教育機関が誕生したのは1920年のことで、この年に高等経済法科学学校と露中技術専門学校が相次いで開設された。両校はいずれも1922年に相次いで正式に高等教育機関となり、ハルビン法科大学および露中工業大学（のちにハルビン工業大学）と改称した。また1925年には、ハルビン教育大学と東洋学・商学大学の二大学が設立された。こうして1920年代には、ハルビンのロシア人社会の相対的安定に支えられて、これらのロシア

人高等教育機関が順調に発展していった。

その後もロシア人高等教育機関は、少なくとも数の上では繁栄を維持していった。1930年の情報によれば、ハルビンの四つのロシア人高等教育機関で学ぶ学生はおよそ1,500人を数えたという。このうち1932年9月には、キリスト教青年会立北満工業大学が設立され、さらにこれに対抗する形で1934年秋には正教会ハルビン主教区が聖ヴラジーミル大学を設立した。これら諸大学は、ロシアの伝統的教育課程に沿ってハルビンのロシア人青年を教育し、在外ロシアのエリートを養成した。

1930年代後半に入ると教育の領域でも日本の影響力が強まり、1937年には満洲国の新学制公布によって教育システムが日本化された。ロシア人教育もまた、4年生の国民学校、2年生の国民優級学校、4年生の国民高等学校、3年または4年制の大学という学校体系に基づくものとされ、既存のロシア型中等教育機関は次第に閉鎖されて、いくつかのロシア人国民高等学校に統合されていった。さらにロシア人高等教育機関は、白系露人事務局を設置者として一校のみ設置するものとされ、既存の高等教育機関を廃止して1938年に満洲国北満学院（ロシア語表記では北満洲大学）が開設された。この大学は、ロシア語で教育をおこなう唯一の高等教育機関として機能し、1945年まで存続してロシア文化を維持する上で大きな役割を果たした。

こうしてハルビンでは、あたかもそこがロシアの地方都市であるかのように、ロシアの生活様式が営まれていた。ある亡命系ロシア人は1938年に、ハルビンのロシア的特徴が「われわれが祖国の外にいることを幾分か忘れさせさせた」と記している。一般のロシア人は多くの場合、日常生活に不可欠な簡単な中国語会話のほかには中国語の知識を必要とせず、ロシア語だけで生活することができたのである。このことを象徴的に示したのは、ハルビンにおけるロシア語出版文化の繁栄であった。

(4) 中国東北開発の拠点となったハルビンでは、ロシア知識人によって学術研究団体が組織され、早くも1908年にはロシア東洋学者協会が設立された。同協会は1926年まで存在し、1923年までは学術雑誌『アジア通報』を刊行して、世界の東洋学研究に大きな刺激を与えた。革命後に知識人が大量に流入したのち、1922年にはハルビンで満洲地方研究協会が設立された。同協会は多数の刊行物を出版するとともに、満洲地方の文物の調査や学術探検を組織した。満洲地方研究協会は1928年に閉鎖されたが、1929年にはハルビンのキリスト教青年会のもとに自然科学・地理学クラブが組織され、その活動が引き継がれてい

った。中国東北は同時代の世界の自然科学者や民俗学者にも未知の地域の一つであり、ハルビンのロシア人学者たちはその活動を通じて、満洲の自然や習俗、歴史、法制度、経済など様々な領域で新たな知見を世界に紹介したのである。

ハルビンはまた、ロシアの地を離れた詩人や作家の創作活動の一大中心地であった。とりわけ人気が高かったのは詩で、A. ネスメロフや A. アチャイルといった優れた詩人がハルビンの読者を魅了した。また 1920 年代末には若い詩人たちがサークル「チュラエフカ」を組織して活発に活動した。多くの詩人たちの作品は、ハルビンで人気を博した週間グラビア雑誌『国境』に発表された。散文作品も多数刊行されたが、なかでも著名な作家は、中国東北の自然と生活を生きいきと描き出した N.A. バイコフであろう。彼の代表作『偉大なる王』は、ハルビンのロシア人社会で愛読されただけでなく、日本語を始め数か国語に翻訳されて彼の名声を高め、ハルビンのロシア文学に対する関心を引き起こした。

音楽の分野でも、ハルビンはロシア文化の伝統を継承していた。すでにロシア革命前に中東鉄道クラブのもとに交響楽団が組織されて、鉄道従業員だけでなく多くのハルビン市民にロシア音楽を中心とするヨーロッパの音楽芸術を提供したが、革命後には多くの優れた音楽家がハルビンに逃れたため、1920 年代にはハルビン音楽界は成熟期を迎えた。音楽教育にも力が注がれるようになり、1921 年にはハルビン第一音楽学校が設立されて帝政ロシアの音楽院と同じ音楽教育が展開された。こうしてハルビンは東アジアにおける西洋音楽の中心地として機能し、日本人や中国人の演奏家に多大の刺激を与えた。

ハルビンはまた演劇の中心地でもあった。バレエはハルビンで最も愛好された芸術の一つであり、才能豊かなダンサーたちが競演して観客を魅了した。またハルビンには多くのバレエ学校が設立され、新たに多数のダンサーが生まれた。ハルビンで教育を受けたダンサーたちは、東アジア各地でロシア仕込みのバレエを演じた。バレエ以外の舞台芸術も盛んで、いくつもの劇団がハルビンで活動した。とくに著名だったのはトムスキー劇団で、主催者 V. I. トムスキーは 1938 年の来哈以降 1942 年までに 650 回の講演をおこなった。彼はまた、著名なバリトン歌手 G. サヤーピンとともに、1943 年に公開された李香蘭主演の満洲映画協会作成映画『私の鶯』にも出演した。ハルビンでは俳優学校も設立された。

1935 年の中東鉄道売却以後、圧倒的な日本の影響力の下で、ロシア人の生活にも次第に日本化の圧力が強まっていった。学校教育では日本語の教育が強制され、神社への参拝も求められた。ロシア人学生が北満学院以外の

大学に進学しようとするれば、すべて日本語で授業を受けなければならなかった。ロシア人社会に対しても、「隣組」のような日本の社会制度が導入された。ロシア人社会を代表して当局と交渉する役割を担った白系露人事務局は、同時にロシア人社会における日本化路線の推進役を演じなければならなかった。

しかし他方で白系露人事務局は、自らに委ねられた権限の範囲内ではあったものの、ロシア人社会が培ってきた伝統を維持する活動を展開することができた。事務局の文化教育局は、様々な学術機関や文化芸術組織を自らの統制下に組み込むとともに、当局の意向に沿う限りでそれらの活動を促進した。事務局はまた、ロシア人劇団や交響楽団の活動を支援したり、事務局が主催して若い芸術家のコンクールを開催したりした。もとより白系露人事務局のロシア文化庇護にはソ連の影響力に対抗して亡命ロシア人を結集するという政治的意図が存在していたが、しかしその活動は事務局の思惑を超えてロシア文化の独自性の維持に貢献したのである。

こうしてハルビンのロシア人は、日本の圧倒的影響下にあつてなお、独自の民族文化を維持していった。そしてハルビンのロシア文化は、東アジアの各地に伝播して各地の文化に多大の刺激を与えることを通じてヨーロッパ文化の一つの規範として機能したのである。

(5) 中東鉄道が満洲国に売却された 1935 年以降、ハルビンのロシア人の運命は大きく動き出した。1935 年 4 月以降に中東鉄道のソ連籍職員の大量帰国が始まると、ソ連から派遣されていた中東鉄道幹部のみならず、中東鉄道に勤務するためにソ連国籍を取得した亡命系ロシア人の多くも、今やソ連となった祖国に向けて家族とともに帰国した。中国側資料によれば、4 月から 8 月までのあいだだけでも 20,535 人のソ連国籍者がハルビンを含む中東鉄道沿線から退去したという。

しかし彼ら帰国者には、過酷な運命が待ち受けていた。帰国から 2 年後の 1937 年には、彼らが戻ったソ連では大テロルによる大量抑圧の嵐が吹き荒れたのである。その渦中で発せられた 1937 年 9 月 20 日付内務人民委員部作戦指令 00593 号は、旧中東鉄道職員であった「ハルビンツィ」の「帰還者」25,000 名がリストアップされており、そのうちすでに 4,500 人を「積極的テロリスト活動および破壊活動・スパイ活動」のかどで抑圧したことを明らかにするとともに、帰国した「ハルビンツィ」に対する大規模な逮捕・抑圧を指示し、抑圧の対象を詳細に規定した。

さらに彼ら「ハルビンツィ」は、1938 年 1 月 31 日付共産党中央委員会指令によって、ポーランド人、ラトヴィア人、ドイツ人、エ

ストニア人などと並んで、「ハルビンツィ」であるがゆえに、あたかも一つの「敵性民族」であるかのように「スパイ活動・破壊活動」の嫌疑で抑圧の対象に指定されたのであった。近年明らかにされた情報によれば、1938年9月10日時点での統計が示すところでは、「ハルビンツィ」として審理された人々の合計が30,938名、このうち銃殺刑の決定を下された人々は19,312名、その他の刑を言い渡された人々が10,669名、裁判にかけられた人々（正式の裁判による審理を受けたことを指す）が251名、取調べに戻された人々が706名であったという。

日中戦争の拡大にともなって、ロシア人社会に対しても日本の戦争遂行への協力が求められるようになり、女性や青少年も当局による統合の対象となっていた。満洲国の種々の記念行事や「反コミンテルンの日」などの行事へのロシア人の動員もおこなわれた。1939年には満洲国国防婦人会ロシア人部が設置され、1941年からはロシア人中等学校に軍事教練が導入された。さらにはロシア人の生活もまた、大きな制約を受けるようになった。

1941年6月に始まった独ソ戦は、ハルビンのロシア人たちのソ連に対する感情に微妙な変化をもたらした。ハルビン出身の現代ロシアの研究者タスキナによれば、独ソ戦の開始後には、旧軍人をはじめとするソ連に対してもっとも極端な傾向の亡命者のあいだでさえ、ソ連を擁護する「祖国防衛主義」的気運が現れたという。また、同時代のハルビンで女性ジャーナリストとして活動したM.L.シャピロは、戦時中には極東のロシア人亡命者のおよそ80パーセントはソ連に対する気持ちを変え、多くの亡命者が昔の苦しみや恨みを忘れて祖国ロシアの勝利を支持した、と回想している。日本とソ連との直接対立が次第に避けられなくなったとき、ハルビン在住ロシア人の多くは、ソ連軍の到来を待ち望むようになっていった。

第二次世界大戦最末期の1945年8月にソ連が満洲国に侵攻し、赤軍は8月20日にハルビン市を占領した。ソ連の内務省部隊スメルシ(SMERSH)は、白系露人事務局が実施した無国籍者に対するアンケート調査資料を押収し、それに基づいてハルビンで反ソ分子の摘発を開始した。これによって、満洲国のロシア人社会で指導的立場にあった多くの無国籍ロシア人が逮捕され、ソ連に連行されて矯正労働収容所に送られた。その正確な数は不明であるが、現代ロシアの研究者ヒサムジノフは、赤軍によるハルビン占領後短期間のうちにおよそ8,000人が逮捕されソ連に連行された、という亡命者側の数値を紹介している。ソ連への連行者数をさらに高く見積もる文献も多い。

追放者に代わってハルビンに登場したのは、軍人や技術者を主体とするソ連国籍者であった。かつてソ連が売却して満洲国の北滿鉄路となっていた旧中東鉄道は、中国長春鉄道と名称を変更して再び中ソ共同管理となった。鉄道職員として雇用するために、さらにはソ連の占領政策の必要を満たすために、残留した「ハルビンツィ」が利用された。ハルビンには「ロシア市民協会」組織され、ソ連の新聞が発行されて学校教育もソヴィエト・システムへと変更された。

1945年11月には彼ら旧ロシア帝国民に対してソヴィエト市民権の取得が認められたが、彼らに与えられたのは正式のパスポートではなく通称「在外居住証」と呼ばれる代用パスポートであった。ソ連の圧倒的な影響の下で無国籍者のソ連国籍への転籍は急速に進み、1946年にはハルビンに18,448人の無国籍者と11,074人のソ連国籍者が居住していたのに対して、翌47年にはソ連国籍者が26,625人に増加し、一方の無国籍者は2,303人にまで減少した。こうして第二次世界大戦後にハルビンは、亡命ロシア人の街からソ連影響下の都市へと急激に変貌した。

(6) 以上の研究成果を踏まえて、本研究が明らかにした論点を次の三点に要約することができる。

第一に、ハルビンのロシア人社会にとって中東鉄道の存在が決定的な意義をもっており、中東鉄道を通じてハルビン在住ロシア人はロシア本国(1924年以降はソ連)との結びつきを維持できた、ということである。ハルビンのロシア人は、中東鉄道の圧倒的影響力を背景にハルビンで主要な役割を果たすことが可能となったのである。

第二に本研究は、日本の強大な影響下におかれた「満洲国」時代にあっても、ハルビンのロシア人社会は一定の凝集性を維持しながら存続し、ロシアの伝統文化の維持とその再生産に多大の努力を払っていたことを明らかにした。もとよりそれは極めて大きな制約を受けたものであり、第二次世界大戦の進展にともなってその制約は一段と大きなものになっていったが、ロシア人独自の組織や教育機関を維持することを通じて、東アジアにおけるロシア世界の維持が可能になった。

本研究の第三の論点は、ハルビンのロシア人社会は東アジアの地にロシア文化を移植したが、そこで開化したロシア文化は一方でロシア的伝統を維持するとともに、もう一方では異文化接触という条件のもとで独自の発展を遂げていった、という主張である。ハルビンのロシア人は、東アジアの未知の文化を積極的に研究し紹介するとともに、部分的にはそれを取り入れながら新たな「ハルビンのロシア文化」を創造していったのである。同時

にハルビンは、アジアにおけるヨーロッパ文化の中心地として機能し、アジア各地の新たな文化創造に多大の刺激を与える役割を果たしたと考えられる。

(3) 連携研究者
該当なし。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 中嶋毅、「スターリンとスターリン主義をめぐって」、『歴史と地理』(山川出版社)、第 614 号、2008 年 5 月、46-49 頁、査読無。
- ② 中嶋毅、「ハルビンのロシア人社会」、松里公孝編『講座スラブ・ユーラシア学 3: ユーラシア—帝国の大陸』、講談社刊、2008 年 3 月、266-294 頁、査読無。
- ③ 中嶋毅、「哈爾濱学院講師アウドシチェンコフのソ連帰国」、『セーヴェル』、第 24 号、2007 年 12 月、92-97 頁、査読無。
- ④ 中嶋毅、「満洲国北満学院の歴史 1938-1945 年」、『ロシア史研究』、第 79 号、2006 年 11 月、42-60 ページ、査読有。

[学会発表] (計 3 件)

- ① Nakashima Takeshi “Educating Engineers in Russian Harbin, 1920-1958”, MAPPING THE HISTORY OF NORTHEAST ASIA (International Workshop), 29 November 2008, Kioloa Coastal Campus of the Australian National University.
- ② 中嶋毅、「『満洲国』時代のハルビンのロシア人高等教育」、研究セミナー「ハルビン—異種混交の街—」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「東アジアの社会変容と国際環境」)、2008 年 7 月 12 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- ③ 中嶋毅、「社会主義ソ連における国家と社会の変容」、メトロポリタン史学会第 2 回秋季シンポジウム、2006 年 11 月 25 日、首都大学東京。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中嶋 毅 (NAKASHIMA TAKESHI)
首都大学東京・大学院人文科学研究科・准教授
研究者番号: 70241495

(2) 研究分担者

該当なし。